

のである。そして下って太平記を見るならば、儒教が、政治の武士の道徳として、たしかな根を下しはじめていることを知ることができるといえる。

このような儒教的な思想傾向が、近世に入ってさらに有力となり、所謂、武士道、あるいは町人の義理とかたちで、国民道徳の基礎を築きあげるに至ったことは、改めて申すまでもない。

平家物語における儒教思想は、先にその一斑を申し述べた如く、仏教に対立するものではなく、それ自身独立の体系をもっているものではないが、儒教思想がやがて我が国民の精神生活を支配するようになる。その最も早い時代に於ける具体的な一つのあらわれとして、注目すべきものである。と云つてよいであらう。

◎なお、この研究には、テキストとして覚一別本を用いた。

真実の宗教としての浄土真宗

伊 東 慧 明

真宗の教学は、浄土真宗が真実の宗教であるということ、自他に明らかにすることではなければならぬ。では、なぜ浄土真宗が真実の宗教であり、仏教の真宗であるといえるのであろうか。

これについて、金子大栄先生は「真宗の名は、浄土教のみで

はなく、広く仏教を呼ぶものである」とのべて、慧空の『叢林集』に、真宗に六重の義ありとするのは「真実の宗教の展開を顕わすものとして当然」であるとし、今日「最も必要なことは、真宗を仏教として了解することである」と教示されている。(顕浄土真実教文類講録・一五頁)

いうまでもなく、仏教とは、仏の教によつて仏の道をゆくものとなることである。したがって、教と道とは、仏教の真宗の眼目である。仏教がなければ、仏道は、この世界に実現されることなく、仏道として展開されぬ仏教は、真実の仏教ではない。しかるに現状はどうか。行証をとまなわぬ仏教が、現に世に存在するではないか。それが、親鸞聖人の「信知、聖道諸教、為_レ在世正法、而全非_レ像末法滅之時機、已失_レ時乖_レ機也」という批判であり、浄土真宗こそ「在世正法、像末法滅、濁惡群萌、齊悲引也」といふべき「時機熟之真教」である。(化身土巻・及び教巻)

「この、如来の本願に立脚地をおく歴史観にもとづいて、仏道の歴史をかえりみれば、そこに、浄土の教こそ真の仏道だと領解し、それによつて仏道の歴史にエポックを形式した多くの祖師が見出された。その浄土の祖師の伝承する仏道の真実が、親鸞聖人をして「聖道諸教行証久廢、浄土真宗証道今盛」と決判せしめたのである。そして、この本願の末法史観を眼として開顕されたのが、教行信証の教学である。

親鸞聖人は、伝統的な教行証の教学に即しながら「真宗の教行証を敬信して」(総序)、しかも、教行証が教理行果として領解されるにいたった誤りを正し、真宗の教行証が、真実の仏道

の教行証であることを明らかにするために、それを教行信証の四法をもってあらわされたのである。すなわち、教行信証の教行は、万人に公開された仏道が、信行道ではなく、衆生の理解をまじえぬ他力廻向の信道であることを明らかにするものである。

教学することは、教によって自己を学ぶことであるが、その教に学ぶ道が、学ぶものに学道の意味を与えるであろう。換言すれば、真実の教にあうものは、必ず行信の仏道をゆくものとされる。自己を広く外に開く教は、開くことを契機として、かえって、内に深く自己の根源に向う道をゆかしめる。その教と道との関係を、我々は、善導大師の「二河の譬喩」における発遣と招喚とによつて、適確に教えられるであろう。

東岸の釈迦発遣の教証は、行者の背後から「仁者、但決定尋此道二行」とはげまして、行者に願生彼国の信境を開き、西岸の弥陀招喚の理証は「汝、一心正念直来」と、欲生我國こそ、行者の眞の生の根源であることを願わしている。これによつて明らかかなように、もし釈迦の発遣がなければ、行者は、三定死の実相を知ることなく、たとえ発願して道を求めても、遂に空しく流転して果てるであろう。

ゆえに、親鸞聖人は『総序』に「心昏識寡、悪重障多」の自覚を機として開顯される行信道を、「特仰如来発遣」と発遣に帰結せしめ、その発遣が仏道の根源に向うものであることを「必帰最勝直道」と示し、それを「専奉斯行、唯崇斯信」と結ばれたのである。

思えば『総序』が、第一段・如来浄土の因源と果海、第二段

・浄土の機縁、第三段・行信の仏道と次第して説かれるのは、それによつて浄土の眞宗が、人生に即しながら、人生を越える宗教であることを示すものであるといえよう。しかも、この人生に即する宗教が、業道に開顯されたものであることによつて、行者をして、願生の行者たらしめるのである。

その心境を、天親菩薩は「世尊、我一心帰命尽十方無碍光如来、願生安乐国」（願生偈）と表白された。親鸞聖人の解釈（尊号真像銘文）によれば「我というは、世親菩薩のわが身」であり、宿業の身の我である。発遣の教は、この我が身に、我をして我たらしめる根源、すなわち本願の大道を行けと勧め。それによつて行者は、かえつて、その根源への還帰を、彼岸の浄土に期するものとなるのである。

これは、自己本来の実現を、純粹未來の浄土、すなわち当来の報土に期することである。宿業の身の自覚が、我は本来仏だといわしめないのであり、自己本来の実現を現在にという道を選捨せしめるのである。本願成就の教が開く道は、本願の道である。ゆえに、行者は、この道において、自己の眞の生に必ず至るといふ信念をうる。この信念が、当来する未來の浄土に往生成仏を期するのである。

このように、眞実の宗教は、願生浄土、現生不退の信念として、我々の、現在の生に実現する。これが、親鸞聖人によつて明らかにされた眞実の宗教としての浄土眞宗である。